

スラブ研究センター・新学術領域（「比較地域大国論」）

研究員ミニ・カンファレンス報告

2月12-13日 於：札幌芸術の森

2011年2月12-13日にかけて、スラブ研究センター所属と新学術領域研究「比較地域大国論」に従事する研究員を中心とした二日間のミニ・カンファレンスを開催した。カンファレンスは、新学術領域研究の班横断的な若手研究差の研究交流を深めるため、かつ通常の地域や専門分野で括られた従来の研究コミュニティでは体験できないような多種多様な興味と関心を有する若手研究者との交流と、報告と議論を通じて新たな知を獲得し様々なテーマへの理解を深めることを主目的とし、新学術領域第5班が主催者となって開催された。このような交流と議論から、異なる時代・専門分野・地域との相互関連性や類似性、また特定テーマの特殊性などを明らかにし、新しい視座から地域研究を見つめ直すことも意図していた。これは「比較」を主題とする新学術領域研究に対して、そのアプローチや視点の有用性、そして今後の課題を提起するうえでも重要な取り組みであると思われた。

二日間で三セッション（各二報告）とラウンドテーブルを開催し、短期間ながら密度の濃いカンファレンスとなった（プログラムは、本報告の最後に添付している）。なお会場については、今般の報告で音楽芸術による表象を検討する報告もあったことから、ピアノホールとセミナー室を有する「札幌芸術の森」での開催となった。

【セッション別報告】

2月12日午後の開幕セッションでは、福田宏氏と宮崎悠氏による研究報告が行われた。福田氏の報告は、チェコの「国民楽派」の代表とされる二人の作曲家、ドヴォジャークとスメタナの比較を通して、同国の国民形成について考察するものであった。福田氏は、チェコにおける国民形成の動向を、公共空間の変容や音楽の受容形態の変容といった観点から

概説した後、後進性の自意識を持った国（チェコ）の音楽を例に取り上げ、「辺境」民族の近代化について論じた。チェコの「国民楽派」を神話化する態度と距離を置く本報告は、自らオリエンタリズムを体現してしまう「国民楽派」の「自虐性」と、当時一世を風靡した社会ダーウィニズムとの関連を指摘した。

他方、宮崎氏の報告は、ロシア領ポーランド出身のシオニストで、第二次アリヤー（1904から1914年に起こった、パレスチナへの大規模な帰還）後もディアスポラに留まった、A. ハルトグラスの生涯を通して、ナショナリズム論を逆照射するものであった。ディアスポラという状況や、ポーランドという地域が果たしてきた役割に重点を置き、同化しなければ排除される立場にあった人々の視点から、初期シオニズムについて考察することを目指した本報告は、ハルトグラスの自伝からの引用をバランスよく織り交ぜることにより、当時のポーランド社会の様子や、東方ユダヤ人から自己を差異化する同化ユダヤ人の姿を生き生きと伝えてくれた。

報告に引き続く討論では、まず福田氏の報告に対し、今日のチェコにおける国民楽派の評価（スメタナとドヴォジャークに対する評価に差異があるか）、日本の国民楽派はどのように位置づけられるか、19世紀のチェコに国民楽派でない作曲家もいるのか、明確なストーリーをもつオペラ以外の音楽の場合は、どのようにしてオリエンタリズムの「自虐性」を論じるのか、といった質問のほか、報告の中で言及された社会ダーウィニズムが、（ヨーロッパのみならず）世界中を巻き込んだ社会理論であり、中国や日本でも多大な影響力をもっていたという補足説明が行われた。他方、宮崎氏に対しては、ドイツチャーがトロツキーの伝記の作者であり、インターナショナリストであるというコメントがなされたほか、反ユダヤ主義者であった農民党の議員ミゼラとハルトグラスの和解を伝えるエピソードが、誰によって、どのように語り継がれてきたのか、という質問が出た。

本セッションは、国民形成という共通のテーマを、チェコ音楽とポーランドのシオニズムという切り口から掘り下げるといふ、専門外の研究者にも分かりやすい、配慮に満ちた

構成であった。各々の報告も、ドヴォジャーク、スメタナ、ハルトグラスといった具体的な人物に焦点が絞られていたことにより、その人物とシオニズムや社会ダーウィニズムとの関係、あるいは、チェコ社会やポーランド社会固有の問題との「折り合いの付け方」が見えやすかった。チェコないしポーランドにおける「国民楽派」「社会ダーウィニズム」「シオニズム運動」の事例の説明も極めて簡潔かつ丁寧で、概説にとどまらない深みがあり、ピアノ演奏（福田氏）や興味深い小さなエピソードの紹介（宮崎氏）などの工夫も凝らされていた。分野横断的な問題意識を、具体的な事例を通して多角的に説明することの大切さを学んだ。



(福田研究員によるピアノ実演)

セッション2は、カンファレンス企画として「All You Need is 'Love'? 「愛」へのまなざし：疑う、語る、見つめる」と題するラウンドテーブルを開催した。このラウンドテーブルでは、人間にとって普遍的な「愛」をテーマとし、ディシプリンや研究地域の異なる4人の研究者が報告を行い、その後に質疑応答を行った。

まず小松久恵氏が報告「愛とはどんなものかしら？—近代インド女性の手記に見る「愛」についての一考察」の中で、インド女性雑誌の読者から投稿された手記の読解を通して、インド社会における男性中心の社会規範と、「個」としての女性の愛情が対立する構図を浮かび上がらせた。続いて池直美氏は「「家族」を規定するものとは？：ワーク・ライフ・バランス及び労働時間等設定改善法とガイドラインからのアプローチ」と題する報告を行った。その中では、近年日本で推進されている「仕事と生活の調和」を目指す取り組みが紹介され、またそのベースとなっている家族を基盤とした愛の実現について問題点が指摘された。さらに飯尾唯紀氏の報告「近世トランシルヴァニアにおける愛、性、結婚」では、主に教会裁判の離婚訴訟の記録を題材として、宗教改革後の当地における結婚生活で男女間の愛が占めていた位置づけが明らかにされた。また宮本万里氏の報告「愛を求める人ターブータン農村の『ナイト・ハンティング』」では、比較的西洋から影響を受けることの少なかったブータン山間部農村で、婚姻にいたる前に独身の男性が女性のもとを訪れる、いわゆる「夜這い」の習慣について紹介が行われた。

質疑応答およびディスカッションでは、社会的規範と「愛」にまつわる実践との間の様々な関係のあり方が議論の中心となった。全体的に今回の報告では、地域や時代による多様性が「愛」の現れ方についての理解を相対化させるものであったことが評価される。その一方で、家族を基盤とする男女間の性愛に話題が集中したため、それとは異なる「愛」のあり方についても検討を加えることが、今後の課題として確認された。



セッション3では、住家正芳氏による「近代中国と日本における『進化』と『宗教』(附「比較」についての若干の考察」と後藤正憲氏による「アイロニーの交換：チュヴァシの詩人 M. シェシュペリの手紙から」の二報告が行われた。住家報告は、清朝末から中華民国期の中国と明治期日本の知識人たちの宗教論を広く参照して、スペンサーの思想が通俗化されたかたちで流行した社会進化論が、生存競争を生き残る「強い」国家をつくるために、国民をつなぐ紐帯として宗教を要請する言説と結びつく諸様態を明らかにした。宗教概念とは普遍的なものではないとする立場からスタートした本報告は、最後に、宗教のように抽象的な「大きな言葉」について比較研究を行う際の方法論の考察によって締めくくられ、それぞれの社会における経験的な記述の蓄積と、理念型を構築し、分析の道具・概念装置を洗練させてゆく作業とを両立する必要が説かれた。

続く後藤報告は、20世紀初頭のチュヴァシ人詩人シェシュペリの手紙における他者との関係性を問題にするものであった。あるロシア人女性宛ての手紙には、恋する女性の前で「自己卑下に満ちた、自分自身をも、また自分の民族をも貶めるような言葉」が書きつけられており、それはチュヴァシ近代文学の祖とされる詩人が自らの詩で描いた民族の崇高な理想とは対照的なものだった。こうした民族表象の矛盾を、批評家たちは手紙におけるアイロニーとして処理することで解決してきた。詩人による主観的表象のまじめさ／戯

れを論じることで、民族的な差異があらかじめ客観的に存在するかのように想像することができたのだ。これに対して報告者は、テキストにアイロニーがを見つけ出されるとき、自己と他者の差異を規定する外在的な認識の体系はすでに破綻しているため、民族的差異はテキスト内部にしかないと指摘した。

質疑応答では、まず後藤報告に関連して、チュヴァシの地理や民族についての詳しい説明を求める声があがった。また詩人が思いを寄せた女性について、その人物像や手紙への反応をたずねる質問もあった。自他の差異の認識の破綻を記すテキストが、テキストの彼方の他者への関心をうみだすという事態が現れたわけで、アイロニーの持つ両義性が実感され、非常に興味深かった。カフカの手紙を連想させるというコメントがあったのも、おそらくこの点と関連している。住家報告については、有神論的進化論というモデルの普遍性・有効性が討論の焦点になった。ロシアのイスラム教地域でもナショナリズムと結びつく類似の進化論が見られるという指摘があり、またロシアにおけるスペンサー受容にも関心が向けられた。比較研究を方法論的に問い直し、より有効なものにしてゆこうとする試みに対しては、人文・社会科学双方の参加者から同意する意見があった。このように両報告とも非常に密度が高く、また慣習化された他者表象に安住せず、他者と共有できる枠組みをそれぞれの仕方で行き届かせる姿勢において一致していた。



最終セッションとなった二日目午後のセッション4は、長縄宣博氏とポール・リチャードソン氏による報告が行われた。両者共にロシアの「周辺地域」を対象とする研究を進めており、それぞれの地域の人々の自意識の形成や中央との関係など相互に関連する報告であった。長縄氏による「メッカ巡礼から見るロシアの輪郭（1865-2010）」はロシア領土内に居住するイスラム教徒のメッカ巡礼がどのように行われているのか、またメッカへの旅が引き起こす巡礼者のアイデンティティーの再構築などの観点が、歴史的な文脈と現在の実践の双方から論じられた。‘Territory, Identity and Competing Representations of the Nation: The Case of the Southern Kurils（領土、アイデンティティー、せめぎ合うネーションの表象：南千島諸島の事例から）’と題されたリチャードソン報告は、1990年代のロシア政府による南千島列島への関心の低さと島民のナショナルな意識の齟齬を取り上げ、領土をめぐる問題からそこに表象されるネーションの実態に迫るものであった。北方領土が日口間の政治・外交的な重要懸案である今日においては、示唆に富む報告であった。

報告に引き続いては、ロシア以外の地域を対象にする研究者からも疑問が提示され、充実した討論が行われた。とりわけ、リチャードソン報告に対して、南千島をロシアの他の境界地域と比較してどのような点で特質であるのかを問う質問と返答はテーマの正鵠を得るものであり、多様な地域研究者が同席する事によって生まれる知的活力を体現するものであった。時間の制約により、二報告が重なり合う観点についての議論を深める事が出来なかった事が悔やまれる。



【全体のまとめ】

以上の様に、様々な地域・時代・専門分野に跨る計四セッションを行った。4名の大学院生を含む、計20名全ての参加者が広い興味と関心を持ち、真摯に取り組んだために、極めて密度の濃い有意義な二日間となった。他方で浮き彫りになったのは、「取り上げるテーマの幅広さ」は「統一感のなさ」とも背中合わせだということである。会全体の構成と大きなテーマの設定については考慮すべきであろう。また、発表・質疑応答ともに時間の不足が大変悔やまれる。個々の報告について参加者が理解を深めるという点では成功だったように思うが、複数の報告から共通する話題をつくり出すというセッション形式の本来のありかたとしては不十分な点もあった。解決策として、制限時間の緩和、報告者同士の討論の組み込み、共通論題の提示、対論者の設置、事前のペーパー共有などが考えられる。

以上のような反省もあるが、初めての試みとしては目立つ失敗もなく次回以降への課題も発見でき、今後も継続していくべき取り組みだと感じている。何より、若手研究者がこのように一堂に会し、交流を深め意見を交換し合う機会となった意義は言い尽くせない。このような素晴らしい機会を可能にしてくれた新学術領域研究第5班代表の山根聡教授と事務仕事を一手に引き受けて下さった大阪大学の渡邊由美子さんに、末筆ながら感謝を申し上げたい。



(文責：安達大輔・井上暁子・小松久恵・後藤正憲・瀧口順也)